



Title	儀礼の象徴論的研究：儀礼の基礎論を目指して
Author(s)	青木, 保
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39360
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	青 木 保
博士の専攻分野の名称	博 士 (人 間 科 学)
学 位 記 番 号	第 1 1 5 0 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 6 年 7 月 2 2 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	儀礼の象徴論的研究 －儀礼の基礎論を目指して－
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 菅野 盾樹 (副査) 教 授 井上 俊 教 授 厚東 洋輔 教 授 梶原 景昭

論 文 内 容 の 要 旨

本書は、文化人類学的なアプローチから儀礼 ritual の象徴的な性格と意味を明らかにしようと試みるものである。本研究は、文化人類学的な異文化社会での実態研究を基本にはすえながらも、より広く理論的な考察を行ない、儀礼の「基礎論」を構築することを目指している。

本書は四部に分けられた個別研究に序論と終論を付し、さらに付論を加えて構成されている。

第I部「象徴的コミュニケーションの二つの型」では、まず儀礼の基本的性格を明らかにすべく、その概念および用語の検討から、人間における儀礼行動の三つのレベル（動物的、社会的、超越－象徴的）の問題を「あいさつ」と「拝礼」行動の分析によって、社会的－象徴的なレベルの考察を行なった。S.J.タムバイアの儀礼の定義（象徴的コミュニケーションの文化的に構成されたシステムである）を再検討することによって、彼の言及していない象徴的コミュニケーションの二つの型をあらためて指摘し、そこからシュツの意味での現象社会学的な「現実の多元性」の議論を用いて、儀礼の「現実」の意味を明らかにしようと試みた。その結果、儀礼と遊びという対極的に位置づけられる「現実」の存在が明らかとなり、その対極の間に「日常的現実」が広がるという、理論的仮説を提出することができた。それは象徴的な意味と実践論的な面において儀礼が「真」のメッセージを発することを示すものであり、「嘘」のメッセージを発する「遊び」と人間の行動を象徴的に対極化させる。こうした儀礼の理論的解明は、従来ともすれば宗教的・呪術的そして神秘的な面に儀礼の象徴面での関心と理解が集中してきた傾向を修正して、より論理的な儀礼の理解へと導くものと考えられる。

第II部「儀礼的行為の遂行性」においては、第I部で得られた儀礼が「真」のメッセージを発する象徴的コミュニケーションを行なうことを背後的理解とした上で、儀礼という「枠組」の中でいかに個々の行為が「真」のメッセージの遂行性を示すものであるのかを解明しようと試みた。儀礼には、その実践の過程において、通常ことばや音や沈黙が複雑に組み合わされているが、そこにみられるさまざまな行為の象徴的意味を、タイ仏教儀礼の事例を中心にそこに示される個々の行為を分析することによって明らかにしようとした。とくにオースチンの「行為遂行的発言」の分析枠組を儀礼の言語（そして音と沈黙）に用いることにより、オースチンの概念の枠組をより広い可能性のあるものにとすると

もに儀礼の「遂行性」の解明を行なった。その結果、「行為遂行的音」と「行為遂行的沈黙」という問題が従来の「行為遂行的発言」研究に新たに加わる形で現れた。事例分析は、タイ仏教儀礼の典型である「タンブン」の儀礼に即して行なわれた。とくにそこにおけるパリッタの役割を手がかりに分析を進めた結果、以上のようなことが明らかになった。これは本人が儀礼の執行者と請願者の両方の立場で経験し、観察したものである。

第Ⅲ部の「儀礼と国家」では、先の第Ⅰ部と第Ⅱ部で検討した儀礼の問題を国家との関係で考察し、それが国家を成立せしめる大きな象徴的原理を实践する形式であることを明らかにしようとした。第Ⅲ部は儀礼からとらえた国家論であり、A.M.ホカートのいまやほとんど顧みられることのない国家の「儀礼的起源」論を再論する形で、儀礼と国家の本質的と思われる結びつきを考察した。事例は、シルック王国のような「未開」社会のレベルから、旧ソビエトのような「社会主義」国家の例まで考察の対象とした。この問題を取り上げるきっかけは、現タイのチャクリ王朝の二百年記念祭儀を直接観察したところにある。現代国家が、日本の場合や英国の場合を含め、何故執拗に「儀礼」を国家の中心的行事として繰返し行なうのかという疑問が根底にある。それは本来すぐれて「社会科学」および「人間科学」の問題である筈である。本部での考察はそうした「社会科学」そして「人間科学」全般へ向けての問題提起でもある。

第Ⅳ部「儀礼の二重性」では、儀礼が「真」のメッセージを発する象徴的な装置あるいはシステムであるとして、それがどのような役割を果たすのかを、その拘束と解放の両面を併せ考察した。イニシエーションの儀礼に端的に現れるように儀礼過程の中の一段階としての「境界状態, liminality」の「反構造」としての重要性の指摘は、V.ターナーによつて有名になったが、それが人間の社会的拘束からの「解放」を意味することの強調は、同時に儀礼が社会の既存秩序と権威体系の確認と強化による「拘束」を意味することを忘れては意味をなさない。本第Ⅳ部ではその両面を考察した。その点で儀礼論の中でのファン・ヘネップ＝ターナー理論に欠けている面を補うことができた。そのことはまたどうして儀礼が繰返し行なわれ、社会と人間の「節目」を作り、その文化的表現が装いを凝らしたものとなるのかを明らかにすることでもある。儀礼のもつ「秩序化」と「反秩序」との二律背反的な意味作用をとらえようと試みたわけであり、その二重作用の中に真の儀礼の意味が存在することを指摘した。ここで論じた面での儀礼の考察は、「社会の理想化」の二つの方向を「原理的」に示すばかりでなく、いわば人間存在のジレンマを露わなものとす。ここにすぐれた儀礼論は「実践論」を含む「象徴論」となる必要があることの理由が存する。本書全体が提示しようとするのも、そうした儀礼論の試み以外のことではないといえる。

終論では、第Ⅰ部の「象徴的コミュニケーションの二つの型」での議論を受けて、儀礼の「死と再生」を考察した。儀礼が「真」のメッセージを発することができるためには、その枠組自体が生き生きとした社会的、そして文化的な意味をもたなければならない。しかるに、時間と変化とは儀礼そのものの枠組からそうした生き生きとした意味を失わせることがある。社会と人間の意識と、儀礼の枠組とその意味との間にずれが生じ、「真」のメッセージが人々に伝達されず、象徴的なコミュニケーションの効力を発揮しなくなる。そのとき儀礼は「死ぬ」。しかし、社会は「象徴的なコミュニケーション」を必要とし、儀礼は新たな生き生きとした意味を生じさせる枠組をもつて再生する。こうした儀礼の「死と再生」とを考察することによって、いわば儀礼の「日常的現実」にとっての意味が明らかになる。儀礼は社会的・文化的矛盾を「隠す」作用をするとともにそれを「露わに」する機能もはたす。儀礼の「死」は社会とその象徴形式との間に生ずる矛盾をはつきりと示すことである。こうした儀礼の性質の変化を分析するとき、タムバイアが指摘するように、記号論的な指標と象徴の概念を用いることは大変有益であることが解った。

以上四部にわたって儀礼のもつ象徴的な意味と作用について考察したが、最後に「儀礼の記述」について考察した。これは文化人類学における「文化記述」に関して現在活発な議論のある問題と関連するが、とくに象徴的・表現的な面をもつ儀礼の記述について、従来あまりに検討されることが無さすぎた問題である。その欠を補うために、ここではゲーテのローマのカーニバルの叙述と人類学者ターナーのリオのカーニバルの記述を対比し分析することによって、「記述」のもつ「科学性」に含まれる困難な問題について考察した。そして「開かれた記述」についての問題提起を行なった。

以上の如く本書は、儀礼の「象徴性」についての考察であり、そのために研究対象となった個別テーマは、現在までの私の儀礼研究で取り扱える範囲の中から、もっとも研究関心の深いものを取り上げた。本研究の志向することは、「序論」でも触れているが、「未開」社会だけでなく現代の先進産業社会においても儀礼が盛んに行なわれている事実を文

化人類学者として深く受け止め、どうして儀礼が近代化理論の予想に反してその存在を誇示し続けるのかという、私自身の視点からすれば「社会科学」そして「人間科学」の問題であるべき学問的課題を明らかにすべく、その解明を試みることにある。

論文審査の結果の要旨

本論文は「人間は象徴を操る社会的動物として、儀礼と遊びをいわば多角的に用いながら〈日常的現実〉を生きている」とする基本的観点から、儀礼の一般理論を模索したものである。本論文の特色と真価は以上につけているが、なおこれを次のように敷衍することができる。

- 1) 問題設定の重要性：人間行動のひとつの様式としての〈儀礼〉は人間を理解するうえで不可欠の論題である。ゆえに、これに正面から挑む試みはそれだけで多大の価値を有するはずであって、実際に、本論文の真価の過半はこの点にある。
- 2) 人間学としての儀礼研究：人間を主題にした総合的な学問的探究を「人間学」と呼ぶなら、少なくとも論文提出者の志向の中にそうした人間学の総合性へと到ろうとする形跡をうかがうことができる。換言すれば、儀礼を単に宗教現象の付随物とみなすのではなく、日常的挨拶や言語行為のうちにもその発現を追い、また単に伝統的社会における儀礼のみならず近代化を遂げた社会における儀礼の問題にも言及し、さらに、儀礼の社会的機能の側面ばかりではなく、人間のあり方・生き方の問題（意味論的問題）にそくした論究がなされているのである。
- 3) 記号論という方法：本論文の多角的で総合的な特色は、本論文が基本的に記号論を方法とすることに由来している。提出者が重要な先行研究として引用ないし援用するもののほとんどは、記号論的発想を共有するものである（たとえば、ゴフマンの相互行為論、リーチやタンバイアの社会人類学、シュッツの現象学的社会学、レヴィ＝ストロースの構造人類学、オースティンの発話行為論、ターナーの象徴人類学、ギアツの解釈学的人類学など、いずれも記号と表現を基軸に理論を構成している）。
- 4) 研究史における独自の位置：以上のような特色をそなえた本論文は、儀礼の人類学的研究の文脈にこれを置くならば、主として英米圏における、80年代までの記号論的ないし解釈学的な動向にみずから棹差す人類学的研究の〈最先端〉に位置しているといえる。その後も、本論文に伍する研究例は国の内外を問わずほとんどないにひとしい。ここでも本論文のメリットを確認することができる。

以上によって、本審査委員会は当該論文が博士（人間科学）の学位を授与する要件を満たすものであると判定した。